

オーストラリア

—くらしとことば—*

樋 口 靖

は じ め に

総面積約 769万km²—日本の22倍—の広大な国土をもつオーストラリアについて「これがオーストラリアです」といった一般論を述べることは、相当長期にわたって在住、滞在した人にとっても難かしいことである。ましてわずか2週間足らずでシドニー、ブリスベーンの町を駆け足旅行しただけの経験からオーストラリアについて何かを述べようとするのは不可能というより無謀に近いことである。本稿の目的はオーストラリアの人々のくらし、ことば、社会についての一般論ではなく、筆者が1984年7月16日～7月27日のオーストラリア旅行中に見聞し、体験したオーストラリアの社会、文化の一端を紹介することである。これがオーストラリア理解の一助となり、オーストラリアに対する読者の興味・関心をすこしでも高めることになれば幸いである。

1 シ ド ニ ー

オーストラリア最古の町シドニーはポート・ジャクソン湾を北に望むなだらかな坂の町で、植民地時代の古きオーストラリアをしのばせるロックスやサーキュラー・キーをはじめ、オペラ・ハウスなどオーストラリア最大の都市らしい近代的な建築も数多く観光スポットに満ちている。

到着が午前でホテルのチェックインまで数時間あればまずセントラルステーションのロッカーに荷物を預け Sydney Explorer Bus に乗ってみるとよい。ダブルデッカーではないがロンドンの Explorer と同じ赤色で、1日乗車券を 7A\$ で購入すれば何度乗り降りしてもよい。まずは20の停留所を一回りしてみるとおおよその観光スポットの位置関係がつかめるであろう。17 km のコースを一回りして Town Hall (市庁舎) で降りるとすぐ近くに中心街センターポ

* 本稿は1984年11月、オーストラリア研究所で行なった口頭発表の旅行報告に基づくものである。

イントがあり、高さ 325m のシドニー・タワーがそびえている。タワーの展望台に昇ると今一
回りした旧市街が一望できる。それからお目あての場所へ行ってみるとよいであろう。

大体の地理が頭に入れば地下鉄を利用してみるのも楽しい。シドニーは地下鉄も利用しやす
くなっていて通勤の足として利用客も多い。ニューヨークの地下鉄とは違い治安は非常に安全
で（ただし乗降口を閉めないで走るのでドアの近くは要注意である）、二階建車輛もあって楽
しい。Town Hall 駅から東の Bondi Junction の方へそれて行く列車もあるからプラットホ
ームで誰かにたずねることも忘れてはならない。オーストラリア英語を体験するためにもどし
どしとたずねるとよい。大抵の人は新切に教えてくれる。

サーキュラー・キー Circular Quay はシドニーの町を探訪するのにはうってつけの地点で
あろう。ここはキャプテン・フィリップが1788年に717名の囚人を含む1000余名の人達を引き
連れて上陸した記念の地（その上陸の日、1月26日は正式ではないがオーストラリアの建国
記念日として多くの人々によってお祝いされる）で、ポート・ジャクソン湾の入り江 Sydney
Cove を囲む左手にはロックス地区があり、植民地時代の古めかしい建物が今はレストランや
コーヒーショップとして改造され人々を引きつけている。右手には1973年に完成されたシドニ
ー・オペラ・ハウスが超近代的な姿でわれわれの目を楽しませてくれる。コンサートホール、
映画館といった施設の他にレストランもあるからここで腹ごしらえしてから探訪をはじめるの
もよい。

サーキュラー・キーには5つのフェリー発着所があり、湾内クルーズや北シドニーにあるコ
アラで有名なタロング動物公園 (No. 5 Wharf からのフェリーに乗って15分で行ける。フェリ
ーの料金は Explorer の1日乗車券があれば無料) などに行く観光客で賑わっている。地下鉄
はここでは高架になっているが、その駅前の通りは絵葉書やみやげものを売る店、“Incredible
Edibles” といった看板を出した軽食スタンドなどが並び気さくな雰囲気楽しい。サーキュ
ラー・キーから南に向ってゆるやかな坂道をのぼって行くとシドニーの中心街に向うことにな
る。

文化の中心地でもあるシドニーにはオーストラリア最古の文学の一つシドニー大学とニュ
ー・サウス・ウェールズ大学 University of NSW それに Macquarie 大学の3校がある。
シドニー大学はメルボルン大学と並び最も歴史の古い、学問水準も高い大学で学生数18,248
名（1984年7月）の規模も大きい大学である。NSW 大学もオーストラリアの19大学の中の
the big seven に数えられる大学で特に応用科学の分野では一流であると言われている。
Macquarie は1967年の創立で文科系の大学である¹⁾。米国の UCLA のような観光スポットと
しても有名な大学を除けば特別な用事がない限り大学のキャンパス・ツアーはあまり行なわれ
ないようであるが、大学構内は立入り自由であるから是非見学するとよい。

1) “How to choose your university” in *The Weekend Australian Magazine*. July 14-15, 1984.

冬休み中であつたのでシドニー大学の構内は学生もまばらであつたが図書館の中には大学らしい雰囲気は漂っていた。入り口で「旅行者ですが館内に入ってもよろしいですか」と尋ねると「どうぞ、どうぞ」と言つて何かインフォメーションを得たければあの人達に聞けと指示してくれた。ものは試しにと「オーストラリア関係の書物を閲覧したいのですが」と頼むと親切に何台も並べてある TV 型のモニターの一台に案内してくれ、オーストラリア関係の書物リストのフィルムを機械に入れてくれ、「希望書籍の番号を教えてくださいれば所在を教えてあげるからあとで来るように」と言う。番号を控えて彼のところに持って行くと、専門書は何階、これは何階にあるから、エレベーターで昇って自由に見てこいという。

1 時間ほど書架の通路に座つてあれこれと拾ひ読みしたあと 1 階に降りてくると学生達が群をなして集まっている。休み明けの試験に備えて、過去数年間の各科目の試験問題が図書館で製本されたものを調べているのである。しばらく待つて手に入れたのを見ると日本語文学の試験問題では堀辰雄や星新一などの作品がとりあげられていたり、TESL（第 2 言語としての英語教授法）の問題では言語学理論の他に「オーストラリアはラッキーカンントリーと言われるが、どういう意味でラッキーなのか」といった外国人学生のための問題もあり興味深い。

2 ブリスベーン

クインズランドの州都ブリスベーン²⁾はシドニーから北へ約 1000 km にある、オーストラリアではシドニー、メルボルンに次ぐ大きな都市で、飛行機でおよそ 1 時間すこし、特急列車で 15～6 時間で到着できる。気候は亜熱帯性で 7～8 月の寒い時期でも平均気温は 15°C を下回ることがなく、シドニーよりも温暖である。

到着したのが土曜日であつたために官公庁をはじめショッピングセンター、レストランはほとんど店を閉めており、人影もまばらであつた。幸い州政府観光局の近くのみやげ物店が開いていたので市内地図を買い町に出た。町の中心街 the city はブリスベーン川にはさまれた底辺と高さが 1.5 km の逆三角形をしたおり、2 時間ほど歩いて回れる広さである。日曜日にも開いている唯一の公共施設は植物園で、ここだけは週末の午後をのんびりと過ごす家族連れや子供たちがいて活気に満ちている。退屈気にベンチに腰かけている 2～3 人の青年にオーストラリア英語のことについて準備してきた質問をしているうちにホームスティ先のラムショー氏が車で迎えに来てくれる時刻となり公園を出た。

Coorparoo にあるラムショー氏の家に向う車中から見える住宅地には昔ながらの高床式の家々も見える。湿度を避け、夏を快適に過すための建築様式であるが、この伝統は近代的設計の

2) Brisbane の発音は [brɪzˈbæn/-ein] でカタカナ表記としてはブリズベンの方が原音に近いとは思うが慣例に従つてブリスベーンとしておく。

家にも残されていて、ラムショー氏の家もそうであったが、丘陵地にある住宅は斜面を利用して建てられており、家の前・後半分は高床式になっており、その空間をガレージやレクリエーションルーム、あるいはラムショー氏のように客室として利用している。

車中で「月曜日にグリフィス大学で人と会うことになっているが、明日の日曜日はどうしよう。ダウントウンへ行っても店などは開いていないし」と言うラムショー氏は「ダウントウンね」とニヤリとする。（月曜日にグリフィス大学からバスで帰るときに大学生に「このバスはダウントウンに行くか」と問うと “You mean down to the city?” と聞きかえされたが、アメリカ語法は万能ではないのである。「Trash can ありますか?」とラムショー夫人にたずねたら「あなた trash can ですって!」と夫人がクスクス笑ってラムショー氏に報告していたがアメリカ英語に対するオーストラリアの人々の反応はおもしろい。これについては後で述べる。）彼はブーメラン・ツアーを利用するとよいと教えてくれた。ブリスベーンからは半日の市内観光（7～10A\$）をはじめサンシャイン・コースト・ツアー（15A\$）、ゴールド・コースト・ツアー（15～18A\$）などの日帰り旅行が5社ほどから売り出されているが毎日出発のツアーを売っているのはブーメラン・ツアーズ社だけいつでも電話で受けつけてくれるから便利である。

シドニーのように地下鉄はないがブリスベーンはバスの路線が発達していて便利である。シドニーでもそうであったがブリスベーンでもバスに乗るときに小銭の心配をする必要はない。ドライバーは小銭を用意して行く先に応じた別々の切符を売りおつりを渡してくれる。「1ドル紙幣は3回折って銭箱に入れよ、つり銭はない」と言って横顔しか見せないアメリカの大都会のバスとは違った人間らしいコミュニケーションが残されていてうれしい。行き先を告げると乗り換えのバスストップの名前を教えてくれるが、“Pardon?” と聞きかえしてもいやな顔をせずにゆっくりとくり返してくれる。

ブリスベーンに着いて3日目、7月23日の月曜日から新学期が始まった。朝夕のバスには通学途中の中高生が大勢乗っているがスクールユニフォームを着た子供が目立つ。帽子をかぶり制服に身をつつんでレディーのような女子学生（何人か寄るとさわがしいのはどこでも同様に “Maidens should be seen, and not heard” である）、カンカン帽に紺の制服で革ぐつをはいてヨーヨー遊びをしている小学生の男の子たちがバスにのっているが座席にすわる子はいない。バスには「Scholars（児童・生徒）は、立っている人がいるときは座らないで下さい」と掲示がある。Scholar を ‘schoolboy or schoolgirl’ の意味で用いるのは COD では archaic な用法（古語）とされているがここでは生きているようである。T シャツにジーンズのカジュアルな服装の児童、生徒と比べると制服の子供たちには scholars という呼び名の方がふさわしいかも知れない。

グリフィス大学を訪問する前にコモンウェルス銀行に寄って日本円を A\$ に両替をしてもら

う際に「2A\$分は2セント硬貨でもらえませんか」と頼むと「エリマキトカゲね」と笑う。日本のエリマキトカゲの異常なブームはオーストラリアでも話題になっており、シドニー・タワーの Podium level (頂上の展望台へ昇るエレベーターのある階) のみやげ物売場にはエリマキトカゲの人形などが置かれていたので“for Japanese?”と言うと売り子が笑ってうなずいていた。グリフィス大学の Dr. Rix は「なんであんなものが多いのかなあ?」と不思議がりながら“Koalas shall return.”とつぶやいていた。

ブリスベンにはクィーンズランド大学 University of Queensland とグリフィス大学 Griffith University の2校がある。クィーンズランド大学は学生数18,102名の大規模校で、グリフィス大学は登録学生3,461名の小規模な大学であるが、「規模」というのはコース、学生数の多少であり、キャンパスのサイズではない。1975年に設立されたグリフィス大学はブッシュランドの風景をとり入れた広大なキャンパスを誇り、オーストラリア史(特にアボリジニーの歴史)の研究が有名であり、アジア研究では‘international reputation’を博している。

学生の喫茶室でブッシュランドを見ながらコーヒーを飲んでいると Dr. Rix は日本食を食べたいならエリザベス通りの「干成」がいいよと勧めてくれた。日本語が達者で日本通の彼の推薦であるから是非とも試すべきであると翌日昼食をとり立寄ってみた。ユカタを着て赤い帯をしめたオーストラリア人の金髪の少女が「いらっしゃいませ」と日本語で注文をとりに来る。“Assorted *sushi*, please.”と英語で注文すると「盛り合せですね。お飲みものは?」ときれいな日本語を話す。職場で必要に迫られて pick up したカタコト日本語ではなさそうである。オーストラリアの高校には日本語のコースがあるところも多いというから学校でも習っていたのかも知れない。盛り合せと日本酒を1合飲んで 7A\$ ほどであったからまああの店ということであろう。Bowen Street と Queen Street にも日本食レストランがある。

3 ホーム・ステイ

オーストラリアを旅行する者にとって有難いサービスとして B&B がある。これはオーストラリア人の一般家庭に滞在する「一泊朝食つき」(Bed & Breakfast) の宿泊であるが、特別な紹介がなくても、個人旅行者でも旅行前に申込みば B&B International 社が希望にあったホスト・ファミリーを紹介してくれる便利なシステムである。料金は3泊4日コースで 60A\$ ~ 90A\$ と経済的であるだけでなく、オーストラリア人の家庭を体験できるという大きな利点である。今回の旅行ではシドニーとブリスベンの両方でこの B&B の“Meet the Aussies”³⁾のパッケージを利用した。

3) 利用の方法についてはオーストラリア政府観光局発行の『オーストラリア・ホリデーガイド』(ATC 公式ガイドブック)を参照するとよい。(03-585-0705 オーストラリア政府観光局東京支局)

シドニーでは Bondi Junction の Maynard 氏の家に、ブリスベーンでは Coorparoo の Ramshow 氏の家にそれぞれ世話になった。シドニーのメイナード家は事務機器の販売会社を経営する御主人と奥さん、それに高卒後2年間ヨーロッパで暮し、帰国してスポーツ用品販売店で働く息子のトニーとの3人家族である。NSW 大学を卒業し今はヨーロッパにいる長男の使っていた部屋が空いているので B&B に登録して外国人を泊めるのを趣味としている中流家庭である。長男が使っていたままの部屋で書棚には専門の法律書だけでなく SOD をはじめ Dickens の作品集も並んでいてなかなかの蔵書である。(おかげで3日間の滞在中に Dickens の *David Copperfield* を再読してナイトキャップにすることができた。)

シドニー到着の2日目の夕食をメイナード氏一家と共にすることになった。(ホストによっては追加料金をとって夕食を用意してくれることもある。) 三男のトニーはガールフレンドらしき女性を連れてやって来た、奥さんは「2〜3ヶ月前まではガールフレンドだったが今はただのお友達よ」とそっと教えてくれた。しばらくすると NSW 大学を出て病院の勤務医をしている二男もガールフレンドの看護婦を連れてやって来て7人の楽しい食事となった。ほうれん草のパイが家庭的な味でとてもおいしかったが、おどろいたのは食後のコーヒーを飲んでいると二男と三男の2人の青年はさっと立ちあがりテーブルの上の食器を台所に運び洗いはじめたのである。それに母親が加わって3人で楽しそうに雑談をしながら後片付けをやっている。メイナード氏に聞くといつもそうだと言って別に気にもとめていないようであるが、立ちあがった2人の動作の自然さに驚かずにはいられなかった。

メイナード家の朝食は簡単で三男のトニーは台所でオートミールを食べている。我々のテーブルにはコーヒーとパンが並べられている。奥さんが Vegemite の大ビンを取りだしてバターの上にこれも塗ってみてはと差し出し、「日本人にはすこし塩からいかもしれないけれど、オーストラリア人はこれが好きなんですよ」と教えてくれる。Vegemite は濃い茶色のイーストのエキスを料理の味付けに使われるものだがオーストラリア人はこれをパンに塗るのが特に好きようで *Everyman's Guide to Down Under*⁴⁾ というオーストラリア案内には “It is lovely, particularly on buttered toast. Some Australians can't live without it—to the point of taking some with them while on vacation.” と説明してある。“I Love Vegemite” と書いた T シャツを着ている子もいる位である。(日本にはイギリスの Marmite が輸入されているが同じ類のものである。) おいしいので “I'll miss it in Japan.” と言うとメイナード夫人はうれしそうに笑っていた。

3日目の朝、まだ寝っているとトニーがドアをドンドン叩いて “Higgy, get up!” と叫んでいる。大あわてでとび出すと庭の木に鳥がとまっている。「あれが kookaburra だよ。」有名なオ

4) Joan & Feyne Weaver, *Everyman's Guide to... Down Under* (Sydney: Rigby, 1984), p. 74.

オーストラリアの珍鳥わらいカワセミが住宅街の木のとっぺんにとまっているのである。大急ぎでカメラをとりにもどろうとしたが飛び去ってしまった。珍らしい鳥を見せてやろうと一生懸命にドアを叩いてくれたトニーの親切がうれしく思われた。

本を買いに行くと言えば何軒もの本屋を紹介し地図を書いてくれ、斜め向いの一人暮らしの老女が住んでいた家がオークションに出ているから見学しろと連れていってくれたメイナード夫人、ブリスベーンに向う特急の発車時刻に充分間に合うのにわざわざ車で街を案内しがてら送ってくれたトニー、御馳走は出さなかったけれど、ありのままの自分たちの生活を見せて、オーストラリア気分を満喫させてくれたメイナード家でのホームスティはとても興味深いものであった。

ブリスベーンでお世話になったラムショー家は若い家庭で、高校を終えてアルバイトをしている娘さんと高校生の息子さんの4人家族である。ラムショー家は客室にベッドを2つ置き、客用のバスルームも備えたプール付きのなかなか立派な設備である。朝食はイングリッシュスタイルでコーンブレック、ベーコン・アンド・エッグ、又はフランクフルトソーセージにグレープフルーツがついている。物静かな夫婦であり口数は多くないがバスの路線の案内や必要なことはテキパキと教えてくれる。初日の土曜日はパーティに出かけ夜遅くもどってきたが2日目の夜は客室の隣のレクリエーションルームで一緒にTVを見ないかと誘ってくれる。高校生の男の子はスポーツ雑誌などを「読みませんか」と差し出してくれるが、こちらから「あの赤い車は君の車？学校へ車で行ってもかまわないの？」などと質問をしない限りは黙っている。おとなしい家族である。宿泊者の生活を disturb しないように努めているようでもあった。別れの日に庭のブーゲンビリアの花を背にした夫妻の写真をとって送ってあげたら夫人からいねいな礼状が届いた。2ヶ所でのホームスティのあとで泊ったホテルは快適ではあったが物足りなくも思えた。

4 米語・英語・オーストラリア英語

イギリス連邦のメンバーであり、人口の30%以上がイギリス系の白人によってしめられている国であるから当然のことながらオーストラリア人のイギリス（ヨーロッパ）志向は強い。シンガポールからの飛行機で隣りあわせた20歳位の女性も、空港から市内行きのバスで話した25～6歳の女性もヨーロッパから帰国したと言っていた。シドニーのメイナード家の三男のトニーもハイスクールを終了して2年程をヨーロッパで過している。メイナード氏は「若いうちに‘go home’して自分達の原点を見ておくことはよいことだと思う」と語っていた。

この傾向は彼らの言語観にもあらわれている。イギリス英語、アメリカ英語の印象についての質問に対し、40人の回答者（10代—6名、20代—22名、30代—6名、40以上—6名）の大半

はイギリス英語を ‘(more) precise’, ‘wonderful’, ‘lovely’ なものとして肯定的にとらえているが、アメリカ英語は ‘harsh’ で ‘rough or slangish’ であると否定的にとらえている。

イギリス英語が実際に ‘superior’ (40代・男) であるかどうかは別にしてもほとんどの人が ‘better’ (40代・女) で ‘beautiful’ (10代・男) であると感じている。‘More carefully enunciated’ (10代・男) よりていねいに発音されるのであるから ‘formal’ (20代・男・女) なものという印象も生じ、それがために ‘snooty’ (20代・男), ‘pedantic’ (20代・男) といった評価もでてくるが、‘terrible’ で ‘irritating’ であるという否定的評価はごく少ない。

イギリスびいきの結果、アメリカ英語に対しては一種の言語的偏見とも思われる評価が与えられる。40名中、わずか3名がアメリカ英語を ‘OK’ (40代・女), ‘plastic’ (10代・男), ‘similar to us (=our English)’ (10代・男) としている(この3名はイギリス英語にも好感をもっている) だけであとは ‘awful’, ‘dreadful’, ‘slurred’, ‘loud’, ‘fake’ と手きびしい。

アメリカ英語の特徴として ‘nasal’ をあげたものが3人(イギリス英語が nasal であるという意見は1人) いる。Nasal twang (鼻声) は American twang と呼ばれることがあるようにアメリカ英語では聞かれることが多いが、オーストラリア英語も nasal であると言われている。G. W. Turner は、オーストラリア英語の鼻音化傾向が phonemic (音素的) なものであるかどうかについては結論は出していないが “A nasal quality appears to be common in Australian voice.” と言って nasal な特徴が見られることを示唆している。⁵⁾

アメリカ英語は ‘loud’ で ‘slow & boring’ であるという意見がそれぞれ2名から出されている。この2点についてオーストラリア英語との比較を試みるのも興味深い。John O’Grady はその著書 *Aussie English* ⁶⁾ の中で “And it (=Aussie English) is delivered as rapidly as possible. Except ‘outback’, where it is often delivered as slowly as possible.” と述べオーストラリア英語は ‘rapid’ であると特徴づけている。声の ‘loudness’ については先の Turner の説明が興味深い。 “Australians and New Zealanders tend to have a light voice. I have heard that military men tend to have a light voice and have heard the suggestion made that this is because they frequently shout or call out of doors, thus losing the resonant tones developed by an indoor voice. If this is so, it may be related to the Australian voice, but we have no reliable observations, merely impressions needing investigation.” ⁷⁾ 戸外で大声を出す軍人のように、広大な outback に住んで大声を出していたためにオーストラリア人やニュージーランド人は resonant tones (よく響く音質) を失ってしまったのであ

5) G. W. Turner, *The English Language in Australia and New Zealand* (London: Longman, 1972), p. 139.

6) John O’Grady, *Aussie English* (Sydney: Lansdowne Press, 1981), p. 7.

7) Turner, *loc. cit.*

ろうか。オーストラリア人のなかに light voice の人が多いことは確かであった。

5 オーストラリアの俗語

オーストラリア英語とは言っても米語やイギリス英語とは何もかも違うわけではない。語彙に関してもほとんどはこれら3つの regional varieties に共通のものであり、特に, formal なレベルにおいては英・米・豪の人たちがコミュニケーションの際に不便を感じることはあまりない。しかしながら informal なレベルにおいては必ずしもそうではない。その社会独特の言いまわしや語句があって、それがその社会の構成員の連帯意識を言語的な立場から高めていると言える。そういう点から考えると俗語はその社会を最もあざやかに描写するものと考えてよいであろう。ここでは俗語のいくつかをとりあげてオーストラリアをのぞいてみよう。

オーストラリアの俗語といえばまず接尾辞 ‘-o’ について触れておく必要がある。COD では “*suf. forming usu. sl. or colloq. variants or derivatives*” (ある語の俗語的又は口語的異形態または派生語を形成する接尾辞) と説明している。Beanfeast は英国の俗語で「祝い, お祭り」という意味であるがこれをよりくだけて言うと beano と短縮形にして接尾辞 ‘-o’ を加える。Blot は「インクなどのしみ, 汚点」という意味の名詞であるが俗語ではこれに ‘-o’ を加えて blotto (ぐでんぐでんに酔っぱらった) という形容詞の派生語を作る。このプロセスはオーストラリア英語だけでなく米語にもイギリス英語にも見られるものであるが、オーストラリア人は特にこれが好きなようで Johnno という風に人名にまで用いている。⁸⁾ 次にそのいくつかを例にあげてみよう。

abo=aboriginal person; beauto; blotto (英も); bottlo=liquor store; Brisso=Brisbanite (ブリスベーン人); commo=communist; daddyo=daddy; drongo=fool; goodo; kiddo=kid; milko (牛乳配達 van にも書かれていた); pinko=socialist; reffo=refugee (from Europe); righto, rightie-o (英も—expressing assent to order or proposal—COD); slobbo; smoko=smoking time (喫煙などのための休憩時間); yobbo=hooligan (英・米も—boy のさかことばに ‘-o’ をつけた); wino=alcoholic person (英・米も)

アンケート用紙にグリフィス大学の M.A.S. (近代アジア学) の Sam 君が次のように書いていた。 “When us coppers or mates go to the pub to get pissed we usually talk bullshit and have a bloody good time. Hope you can join us for a good piss up sometime and learn a little more Aussie English.” Sam 君なる人物がニタリと笑いながら書いている様子が想像できるが、ここでは注釈をつけず原文のままにしておく。彼の提案するようにパブはオ

8) 研究社『現代英和辞典』はこの接尾辞をオーストラリア (に多い) 用法としている。

ーストラリア男性（女性も結構でしょうが）が家庭の次にくつろげる場所であり、ここで酒をくみかわしながら雑談できる奴こそマイト mate と呼ぶにふさわしい相手なのである。パブこそ俗語（卑俗語も含めて）の宝庫なのである。アルコール好きのオーストラリア人を理解するために酒に関する語をすこしあげておく。

アルコール類一般を俗語では booze とか grog と呼ぶ。grog はビールを指す場合もあるがビールをあらわす語としては turps（これもアルコール一般を指すという人もいる）や amber fluid（こはく色の液体）といったやや poetic な語もある。このあたりは common use ではあるが piss となるとこれは卑俗語である。piss はビールという名詞だけではなく get pissed = get drunk のように形容詞としても用いられるし、piss up = booze up = drinking party や pisspot = a person who drinks a lot のように複合語も形成する。高校生のある男子はビールを super, standard, fish piss に分類すると言っていた。スーパーは draught beer のことで、スタンダードは light beer（発音はもち論 loit beea⁹⁾ である）、最後のは XXXX（クイーンズランド州で生産されているビール）だそうである。ボトルや缶に入ったビールは coldie というが缶入りのは tinnie と呼ばれる。“Let’s crack a tinnie.”は「ビールの tin can をあける」ことである。通常のビールは 750ml 入りであるがその半分程のサイズのビールは stubby（小さいの）である。

ワインは plonk, red ned, Mickey Willies などと呼ばれることがある。plonk の語源について COD は plunk（ドスンと倒れる）の変形 plonk から来た（安物のワインは飲みすぎるとこうなるのか）あるいはフランス語の vin blanc（白ワイン）の訛ったものかではないかとしている。red ned については情報を得られなかった。Mickey Willies は McWilliam’s Wine の意味でオーストラリアのメーカー名である。

オーストラリア式のパブでの飲み方についてのべておこう。仮に3人でパブに入ったとする。まず最初の一杯を A 氏がおごる。すると次の一杯の勘定は B 氏が払い、C 氏が最後に “It’s my shout.” (=It’s my turn to buy every one a drink.)（次は俺のおごりだ）と言うことにまる。3人で入れば必ず3杯は飲む覚悟をしていなければならない。アルコールに弱い人はなるべく少人数でパブに入ることである。さもないと get pissed/smashed になってしまうであろう。ビールを飲みすぎると当然のことながら自然現象におそわれるが、これについての表現はここでは省略する。

最後にオーストラリアの通貨についてすこし述べておく。オーストラリアの通貨は現在はオーストラリア・ドルであるがポンド通貨の時代の語が残されていたり、アメリカ式の呼び名があったりで興味深い。

9) [ei] が [ai] になるため nine, light などの [ai] は [ɔi] に近い音 [ɒi] となる。

通貨（特に紙幣）一般をあらわす語としては cabbage があるがこれは米俗語からの借用である。ドルを buck と呼ぶのも米語と同じであるが、buck（雄じか）から派生して doe（雌じか）をドルの意味で使うこともあるがこれは nonce word かもしれぬ。2ドルは時には quid と呼ばれるが、quid は英俗語で1ポンドのことであるから換算して転用したのであろう。同じようなものに 2 bob がある。Dickens の *A Christmas Carol* に “Bob had but fifteen ‘Bob’ a-week himself”（ボブは一週間にわずか15シリングのかせぎであった）という一節があるが ‘Bob’ は1シリング＝5ペンスをあらわす俗語で19世紀から用いられている語である。オーストラリアでは 2 bob=20 cents の意味で今も使われている。ポンド通貨の名残の語にもう一つ zack がある。以前は6ペンス硬貨を指していたが今では5セントのことを言う。20ポンドと同様に20ドルは a score と呼ばれ、また米国紙幣が greenback であるように redback と呼ばれる。

通貨に関してはあまり別名はないようで40人中23名は貨幣の別名はないと解答し40歳以上というある女性は “Decimal currency is still too new.” とコメントしていた。

おわりに

2週間足らずの短い期間ではあったがオーストラリアをこの目で、耳で、肌で体験できた貴重な旅であった。

英語が上手ですねとほめられて、これなら Aussie English も何とかなるだろうとパブにとび込んでまわりの連中の会話に聞き耳を立てたもののさっぱり理解できず落胆したことも何度かあった。（パブは勉強のために行くところではなく、あくまで to slurp up a few grogs する場所なのである。）

方向音痴のために民宿先への道がわからなくなってしまい親切な男性に車で送ってもらったりという失敗もあった。帰国の航空便の予約確認の電話をしたものの相手の accent がひどく、さっぱり内容がわからず、ホテルのフロント嬢に助けてもらったこともあった。さまざまな経験の中で知ったこれこそオーストラリア人の英語と思われる表現に “No worries.” がある。

民宿先とは全く別の方向に来てしまった私に「ノー・ウォリーズ」といってガレージからわざわざ車を出してきてくれたお父さん。電話が通じず困っていると言えば「ノー・ウォリーズ」といって代わりに電話をしておいてくれた受付嬢。困っている時に聞くこの言葉ほど暖かいものはなかった。

陽気で、こせこせしないオーストラリア人はこの「心配しないで」という言葉が割合と好きなようで、もっと広い意味で用いていると思われる。質問用紙の最後に「ご協力ありがとうございます

ざいました」と印刷していたら、その下に “No worries, sweetheart” と書いていたグリフィス大学の女子学生、エリマキトカゲのコインに両替してもらった札を言うに「ノー・ウォリーズ」と言って笑っていた銀行員。シドニーのセントラル駅へ車で送ってくれ「ノー・ウォリーズ」と言って別れたメイナード家のトニー。 “No worries.” には常にオーストラリア人の明るい笑顔がついているのである。アメリカ人の陽気な国民性を表わすことばが “Take it easy.” なら、南半球の陽気な国民オーストラリア人の mateship を表わすことばは “No worries, mate.” だと言えよう。